

異常なまでの“静寂感” 4レイヤー“多段振り子”を投入した オーディオラックの最高傑作

WELLFLOAT(ウェルフフロート)の集大成として本誌の夏号で衝撃のデビューを飾ったオーディオラック「ペガサスII」がついに本格発売をスタートさせた。世界初の4レイヤー“多段振り子”を投入したこのオーディオラックは当然本年度の「オーディオアクセサリ」銘機賞2025でも最高評価を獲得。昨年秋に登場した2段振り子構造のオーディオボード「ウェルフフロート・ダブル」とともに“グランプリ”を受賞している。そこで改めてこの2つの製品をクローズアップ。ブラック仕上げもラインアップされた両モデルに込められた技術と音質の効果を井上千岳氏と林 正義氏がレポートする。

Photo by 田代法生

WELLFLOAT

Pegasus II



Grand Prix

オーディオラック

※カラーはシルバーを基本色として、黒色塗装仕上げも用意

※写真は2層多段振り子のウェルフフロート・ボード「Double 4548」を乗せた状態。これにより4層多段振り子のハイエンドラックとなる

●設計：ラックシェル72層+Double 4548ボード2層による4層「多段振り子」構造 ●材質：ステンレス(シェルフ部)、アルミニウム(支柱部)

●サイズ：635 x 501mm(床面設置サイズ) ●耐荷重：1段あたり95kg / 静荷重(Double4548使用時、機器重量85kgまで)

U字バネによる吊り構造から始まったウェルフフロートは、ピアノ用ウェルフフロート・メカを応用したウェルデルタ/パシリスで一応の完成を見たと言っている。一方で多段振り子をヒントに開発された4段振り子構造による単一型インシュレーター「バベル」が登場。理論的にはいくらでも段数を増やすことは可能だが(だからバベルなのだそう!)、とにかく10の16乗分の1という驚異的な除振比によって圧倒的な音質改善を実現した。この多段振り子構造は2段メカを脚部としたオーディオボード「ウェルフフロート・ダブル」に活用されて、使いやすさも向上させている。

さてここからが本題である。ウェルフフロートは2020年にペガサスという初のラックを作り上げた。ウェルフフロート・メカを各段12個ずつ使った吊り構造で、それまでの技術の総結集という位置付

支柱部2段とボードの2段で4段の多段振り子構造が完成



Text by
井上千岳
Chitake Inoue

けである。これは海外でも大きな反響を呼び、ベストセラーとなったそうである。しかしそこから現在までの4年間に、先に述べたバベルなどの多段振り子構造が開発された。その成果を受けて、ペガサスは大幅な改良を受けることとなったのである。それがこのペガサスIIだ。

ペガサスIIの棚板には、各段2枚ずつの可動部がある。この2枚の可動板は、ジョイントに組み込まれた2基のメカに別々に取り付けられているため独立して動く。このメカは2段構成つまりウェルフフロート・ダブルと同じ多段振り子である。棚板の中央部は大きくくりぬかれていて、これを覆う形でボードつまりウェルフフロート・ダブルが乗ることになる。こうして支柱部の2段とボードの2段、合わせて4段の多段振り子構造ができ上がる仕組みである。

このラックについては以前にも紹介したことがあるが、今回は塗装をブラックとしたニューバージョンが登場した。構造は変わらな





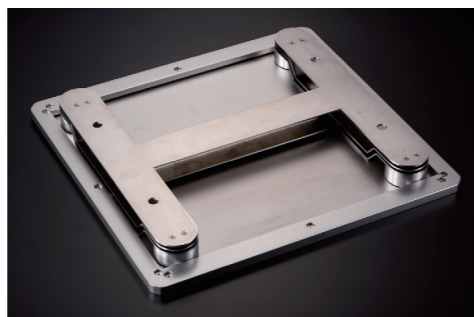
WELLFLOAT WELLFLOAT Double



オーディオボード ¥385,000(税込)

※通常仕様のシルバーのほか、外周アルミ枠のみ黒色アルマイト仕上げのモデルも新たにラインアップ

●型名：Double 4548/Double 4548-BK ●設計：小型ウェルフロートメカ8機(4機×2層)内蔵
●材料：ステンレス、アルミニウム ●耐荷重：200kg(静荷重) ●サイズ：480W×450D×44Dmm ●質量：10.8kg



吊り構造のウェルフロートメカは1カ所につき2層を連結。シャーシ上の4カ所に装着している

このラックには同社の2層多段振り子のウェルフロート・ボード「Double 4548」を乗せることにより4層多段振り子のハイエンドラックとなるのだ。CDとプリ、パワーアンプまでフルシステムを搭載して試聴した

力とはエネルギーとか言っていたのは、実は相当程度ノイズが含まれていたのではないかと思うのだ。だからこのラックで聴くと、ソースの本当の信号だけが聴こえてくる、そういう雰囲気になる。バロックはまさしくいま言った静寂感そのものの鳴り方だ。弦楽器の手触りが軽い。そして潤いに溢れている。アンサンブルにまるで汚れがなく、リユートやオルガンなど目立たない楽器にも存在感がある。そして音数が多い。微小な音でも実在感が備わっている。ピアノは非常にリアルな出方だ。タッチのエネルギーが高いのだが、不思議にガンガンしたうるさい手応えではない。低音など強靱その

澄んだ静かさに覆われている。瞬発力

「ペガサスII」を初めて体験
静寂の中から音楽が立ち上がる
未体験ゾーンのS/Nと解像力



Text by
林 正儀
Masanori Hayashi



井上千岳氏の試聴取材では「ペガサスII」の組み立て作業も立ち会った。一般の方でも容易にセットすることができる

のだが、全てのマシンが高精度に生まれ変わったようだ。未体験ゾーンというべき全体のS/Nと音の解像力が震えがきた。これぞデリケートさの極み。ノイズや滲みによるマスキングが一切ない。静寂の中から音楽の本質が立ち上がる印象だ。幸田浩子の『オペラリア集』は肌合いの柔らさや旋律の滑らかさ。大編成の「幻想」では金管、打の壮大なスケールと遠近描写の中にも、風が吹き渡るような低減のユニゾン聴かせた。ジャズは熱量とコントラストを高め、演奏の勢いが一気に増した。定位明快。きびきびとしたスピード感も爽やかだ。ピアノやドラム、サクソスなどバンドメンバーの位置情報や動き、音の重なりが全て見えるようで、彼らが何をしようとしているかがわかる。リスナーがライブに参加しているような一体感が共有できた。

の音が、耳を刺すようなものではなく力強さだけを感じる。オーケストラは鮮度が見事に利いて、どこも生々しい感触に富んでいる。瞬発力は高いが、一音一音の粒子が極めてきめ細かく新鮮なのだ。音色が多彩なのは、汚れや濁りがないからに違いない。ペガサスIIが消し去るのは機械的な振動だけではない。素子や導体の中の電子の動きを攪乱する重力などの影響まで、この多段振り子は抑えてしまう。だから電子が動きやすく、正確な信号が伝わるのである。量子レベルというのはそういうことだ、と永田氏は言う。録音時のコンピューターをパベルに乗せて音が各段に改善される理由は、そう考えないと説明がつかない。この静寂感の違いも、それで理解できるように思う。



ラック支柱部には2層のWELLFLOATメカが搭載されている



2層多段振り子のラックシェルフ。2層のWELLFLOATメカが搭載されており、3枚ボトムプレートには、硬質ステンレススチールを採用。高剛性化さと低重心化を実現している。このシェルフのみでもオーディオラックとして使用できる



「ペガサスII」にオーディオ機器を搭載した写真。ACCUPHASEのパワーアンプ「P-7100」も設置できる

「ペガサスII」は各ユニットごとの販売となるため1段から4段までシステムに合わせて自由に選択できる

ペガサスII	組合せ価格例(税別)	ラックシェルフ部のみ、及びボードにDouble 4548を使用した場合
構成例		
ラックシェルフ部のみ	45万円	98万円
Double 4548 onSET	80万円	168万円
構成例		
ラックシェルフ部のみ	151万円	155万円
Double 4548 onSET	256万円	260万円

高級感があるように思えるが、それは好き好きかもしれない。1段から4段仕様まで用意機器に併せて選択できる

折角の機会なので、組み立ての様子を見せてもらうことにした。板は3枚になっていて上部2枚が可動部。最下層の1枚で脚や支柱に取り付ける構造だ。この1段だけでも1段ラックつまりオーディオボードとして使用することができる。そういう例も少なくないからだ。

この上に支柱を嵌め込んで締め、次に2段目を乗せるという具合である。支柱の高さを揃えて水平を確保することが重要だそう。思ったよりも複雑な作業ではない。支柱の長さは長短用意されている。収納する機材の高さに合わせて選べばいいわけだ。またその気になれば段数を積み増すことは可能だが、安定性や安全性を考えると3段程度がちょうどいいように感じられる。4段以上のものが目の前になると圧迫感があるし、見た目にも怖い。ただ壁際に置くのならそれでも問題はなにかもされない。とにかく座った位置からスピーカーが隠れないようにしておく必要がある。

このラックだけのままで使ってもいい。それだけでも十分多段振り子の効果は得られるはずである。しかしできるならボードつまりウェルフロート・ダブルを乗せて使いたいものだ。なにしろそれで4段振り子になるわけだから。

4段にこだわるのは先にも触れたが、この状態での除振比は10の16乗分の1となるからだ。勘定してみればわかるが、10の16乗は1京である。1京分の1というのはもはや量子レベルだ、とウェルフロートを主宰するジークレフ音響の永田良二氏は言う。折角のウェルフロートなのだから、やはりそ

これまでの除振比は欲しい。本当の音楽信号だけが聴こえる多彩な音色と極めて繊細で新鮮

さて音を出してみると、ああやっぱりそうだなと思う。やっぱりというのは、ペガサスIIの音は他の場合とちよつと毛色が違うように感じるのだ。とにかく静かである。ただ音の周囲が静まって音楽音が浮き上がってきた、というレベルのものではない。何もかも消えてしまったような空虚な感触さえ受けるほどの異常な静寂感である。空間の全てがしんとして、出てくる音まで浄水で洗ったように

澄んだ静かさに覆われている。瞬発

ものだが、耳を刺すようなものではなく力強さだけを感じる。オーケストラは鮮度が見事に利いて、どこも生々しい感触に富んでいる。瞬発力は高いが、一音一音の粒子が極めてきめ細かく新鮮なのだ。音色が多彩なのは、汚れや濁りがないからに違いない。

録音時のコンピューターをパベルに乗せて音が各段に改善される理由は、そう考えないと説明がつかない。この静寂感の違いも、それで理解できるように思う。

